

目次

はじめに 佐藤嘉幸 15

第一部 前期 I 狂気、規範、言語

フーコーにおける「狂気」の言語の問題
——後期思想との関連から

武田宙也
25

禁忌と真実の一致

——「異常者たち」とはなにか

田中祐理子

47

脳科学の歴史と精神の科学の歴史をひとつの全体として考える

エマニュエル・ドリール

69

——ミシェル・フーコーの『精神医学の権力』における神経学的身体の出現

第二部 前期Ⅱ

権力、国家、階級

国家装置から権力諸装置へ 配備へ

佐藤嘉幸

93

——フーコー『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』をめぐって

フーコー『刑罰の理論と制度』（一九七一年—一九七二年）における
アルチュセールの痕跡

エティエンヌ・バリバル

116

懲罰社会のその先へ

相澤伸依

123

——フーコー『懲罰社会』をめぐる一考察

人民の回帰？

箱田徹

146

——フーコー戦争論のポテンシャルティ

監獄という新たな前線の出現

ダニエル・ドゥフェール

166

第三部 中期

統治性、生権力、生政治

階級闘争、労働力、身体 of 政治

サンドロ・メッザードラ

191

——ミシェル・フーコーの著作におけるマルクスのテーマ系

生命的ー主権的複合体

藤田公二郎

210

——フーコーの人文科学批判の射程

生政治と予防接種

西迫大祐

232

生政治批判

マウリツィオ・ラッツアラート

258

第四部 後期 主体性、真理、パレーシア

主体性、批判、真理

フリリップ・サボ 275

規範化される生から規範をつくる生へ

坂本尚志 293

——カンギレムと八〇年代のフーコー

パレーシアと精神分析

立木康介 317

倒錯者の不確かな肖像

久保田泰考 351

——最晩年講義録から『狂気の歴史』を読み直す

恐れなき発言と抵抗

ジュデイス・バトラー 368

あとがき 立木康介 383

凡例

本書では、フーコーの主な著作・講義録から引用を行う際、引用文に続く（ ）内に、原著の略号とともに、原著の頁数をアラビア数字で、邦訳書（存在する場合）の頁数を漢数字で註記する。たとえば『知への意志』の原著七八頁、邦訳七六頁からの引用は、「(VS 78 / 七六)」のように記す。略号とそれに対応する原著、及び邦訳書は、以下の通り。

【単行本】（生前に出版されたもの、出版年順）

- FD : *Folie et déraison : Histoire de la folie à l'âge classique*. Paris : Pion, 1961.
RR : *Raymond Ronsseil*. Paris : Gallimard, 1963. (「ノーマン・ルーセル」、豊崎光一訳、法政大学出版局、東京、一九七五年。)
MC : *Les Mots et les choses : Une archéologie des sciences humaines*. Paris : Gallimard, 1966. (「言葉と物——人文科学の考古学」、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、東京、一九七四年。)
AS : *L'Archéologie du savoir*. Paris : Gallimard, 1969. (『知の考古学』、慎改康之訳、河出書房新社（河出文庫）、東京、二〇一二年。)
HF : *Histoire de la folie à l'âge classique ; suivi de La folie, absence d'être et Mon corps, ce papier, ce feu*. Paris : Gallimard, 1971. (『狂気の歴史——古典主義時代における』、田村俶訳、新潮社、東京、一九七五年。)
NC : *Naissance de la clinique : Une archéologie du regard médical*. Paris : Presses Universitaires de France, 1971. (『臨床医学の誕生』、神谷美恵子訳、みすず書房、東京、一九六九年。)
SP : *Surveiller et punir : Naissance de la prison*. Paris : Gallimard, 1975. (『監獄の誕生——監視と処罰』、田村俶訳、新潮社、東京、一九七七年。)
VS : *Histoire de la sexualité 1 : La Volonté de savoir*. Paris : Gallimard, 1976. (『性の歴史Ⅰ——知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、東京、一九八六年。)
UP : *Histoire de la sexualité 2 : L'Usage des plaisirs*. Paris : Gallimard, 1984. (『性の歴史Ⅱ——快楽の活用』、田村俶訳、新潮社、東京、一九八六年。)

【ローゼン・フ・ソナムス講義録】（講義の開講年順）

- LVS : *Leçons sur la volonté de savoir : Cours au Collège de France (1970-1971) ; suivi de Le savoir d'Édipe, édition établie sous la direction de Daniel Defert*. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2011. (『知への意志』講義——ローゼン・フ・ソナムス講義 1970-1971年度) (『シ

ル・フーコー講義集成1) 慎改康之・藤山真訳、筑摩書房、東京、二〇一四年。

TIP : *Theories et institutions pénales : Cours au Collège de France (1971-1972)*, édition établie sous la direction de Bernard E. Harcourt. Paris : EHESS/Gallimard/Le Seuil, 2015.

LSP : *La Société punitive : Cours au Collège de France (1972-1973)*, édition établie sous la direction de Bernard E. Harcourt. Paris : EHESS/Gallimard/Le Seuil, 2013. (『処罰社会——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1972-1973 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成3) 八幡恵一訳、筑摩書房、東京、二〇一四年。)

PP : *Pouvoir psychiatrique : Cours au Collège de France (1973-1974)*, édition établie sous la direction de Jacques Lagrange. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2003. (『精神医学の権力——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1973-1974 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成4) 慎改康之訳、筑摩書房、東京、二〇〇六年。)

AN : *Les Anormaux : Cours au Collège de France (1974-1975)*, édition établie sous la direction de Valerio Marchetti et Antonella Salomoni. Paris : Gallimard/Le Seuil, 1999. (『異常者たち——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1974-1975 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成5) 慎改康之訳、筑摩書房、東京、二〇〇二年。)

DS : « *Il faut défendre la société* » : *Cours au Collège de France (1975-1976)*, édition établie sous la direction de Mauro Bertani et Alessandro Fontana. Paris : Gallimard/Le Seuil, 1997. (『社会は防衛しなければならない』——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1975-1976 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成6) 石田英敏・小野正嗣訳、筑摩書房、東京、二〇〇七年。)

STP : *Sécurité, territoire, population : Cours au Collège de France (1977-1978)*, édition établie sous la direction de Michel Senellart. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2004. (『安全・領土・人口——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1977-1978 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成7) 高桑和巳訳、筑摩書房、東京、二〇〇七年。)

NBP : *Naissance de la biopolitique : Cours au Collège de France (1978-1979)*, édition établie sous la direction de Michel Senellart. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2004. (『政治の誕生——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1978-1979 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成8) 慎改康之訳、筑摩書房、東京、二〇〇八年。)

HS : 2001. *L'Herméneutique du sujet : Cours au Collège de France (1981-1982)*, édition établie sous la direction de Frédéric Gros. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2001. (『主体の解釈学——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1981-1982 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成11) 廣瀬浩司・原和之訳、筑摩書房、東京、二〇〇四年。)

GSA : *Le Gouvernement de soi et des autres : Cours au Collège de France (1982-1983)*, édition établie sous la direction de Frédéric Gros. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2008. (『自己と他者の統治——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1982-1983 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成

12) 阿部崇訳、筑摩書房、東京、二〇一〇年。)

CV : *Le Courage de la vérité : Cours au Collège de France (1983-1984)*, édition établie sous la direction de Frédéric Gros. Paris : Gallimard/Le Seuil, 2009. (『真理の勇氣——コレーシヤ・ユ・フランス講義 1983-1984 年度』(『ミシェル・フーコー講義集成13) 慎改康之訳、筑摩書房、東京、二〇一二年。)

【フーコーとPLD】

PLD : *Œuvres*, édition publiée sous la direction de Frédéric Gros, 2 tomes. Paris : Gallimard (coll. « Bibliothèque de la Pléiade »), 2015.

* この版からの引用は、まず当該の文献の略号を記し、それに続いて PLD の文字を、巻数(第一巻か第二巻か)及び頁数を添えて表示する。たとえば、『狂気の歴史』をフレイヤード版第一巻三八七頁、邦訳三六〇頁から引用する場合、「(HF, PLD) 387 / 三六〇」と記す。

【Dits et écrits (『思考集成』)】

DE1, DE2, DE3, DE4 : *Dits et écrits*, 1954-1984, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald, 4 tomes. Paris : Gallimard, 1994.

DE1, DE11 : *Dits et écrits*, 1954-1984, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald, 2 tomes. Paris : Gallimard (coll. « Quarto »), 2001.

『ミシェル・フーコー思考集成』全一〇巻、蓮實重彦・渡辺守章監修、筑摩書房、東京、一九九八—二〇〇二年。

『フーコー・コレクシオン』全七巻、小林康夫・石田英敏・松浦寿輝編、筑摩書房(ちくま学芸文庫)、東京、二〇〇六年。

* *Dits et écrits* には、原著・邦訳ともに二つずつのヴァージョンが存在するため、註記は、次の順序で行う。(1) 引用される文献の発表年、(2) *Dits et écrits* 内で当該文献に割り振られた番号(この番号はフランス語の二つの版で同一)、(3) DE の文字にフランス語一九九四年版(四巻組)からの引用の場合はアラビア数字で、フランス語二〇〇一年版(二巻組)からの引用の場合にはローマ数字で巻数を添えた上で、頁番号、(4) 対応する邦訳文献の巻番号を表すローマ数字(フーコー・コレクシオン)に準じる場合にはその前に「C」の文字を付す)と、頁数を表す漢数字。したがって、たとえば「科学の考古学について」からフランス語二〇〇一年版、及び『思考集成』に依拠して引用する場合には、「(1968, 59 DE1 740-742 / III 111—113)」のように表示する。

【その他 死後出版】

- FS : *Fearless Speech*, edited by Joseph Peterson. New York: Semiotext(e), 2001. (『真理とディスタール——パレーシア講義』、中山元訳、筑摩書房、東京、二〇〇二年。)
- JA : « Je suis un artificier » in Droit, Roger-Pol. *Michel Foucault. Entretiens*. Paris : Odile Jacob, 2004. (『私は花火師です』、『私は花火師です——フーコーは語る』、中山元訳、筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、東京、二〇〇八年。)
- MPDV : *Mal faire, dire vrai : Fonction de l'aveu en justice : Cours de Louvain, 1981*, édition établie par Fabienne Brion et Bernard E. Harcourt. Louvain-la-Neuve : Presses universitaires de Louvain, 2012. (『悪きなし、真実を言う——ルーヴァン講義 1981』、市田良彦監訳、河出書房新社、東京、二〇一五年。)
- OHS : *L'Origine de l'héméneutique de soi : Conférences prononcées à Dartmouth College*, édition établie par Henri-Paul Fruchaud et Daniele Lorenzini. Paris : Vrin, 2013.
- CRT : « Qu'est-ce que la critique ? » in *Qu'est-ce que la critique ? ; suivi de La culture de soi*, édition établie par Henri-Paul Fruchaud et Daniele Lorenzini. Paris : Vrin, 2015. (『批判とは何か』、『私は花火師です——フーコーは語る』、中山元訳、筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、東京、二〇〇八年。)
- DV : *Discours et vérité ; précédé de La parrésia*, édition établie par Henri-Paul Fruchaud et Daniele Lorenzini. Paris : Vrin, 2016.
- AC : *Histoire de la sexualité 4 : Les aveux de la chair*, édition établie par Frédéric Gros. Paris : Gallimard, 2018. (『性の歴史Ⅳ——肉の告白』、慎改康之訳、新潮社、東京、二〇二〇年。)

*

引用箇所には、対応する邦訳がすでに存在する場合でも、必ずしもそれに拠らず、議論の文脈や訳語の選択に鑑み、本書の各執筆者が独自の訳文を当てたり、既存の邦訳の一部を改めたりした箇所がある。また、引用文中の「」内は引用者による補足である。なお、外国語で書かれた論考の翻訳では、「」内は翻訳者による註記を示す。

はじめに

佐藤嘉幸

ミシェル・フーコーの『コレージュ・ド・フランス講義録』は、フーコーの死後約一〇年が経過した一九九七年に刊行が始まり、二〇一五年にようやく全一三巻の刊行が終了した。講義録刊行の終了によって、ようやく私たちは、コレージュ・ド・フランス講義のコーパス全体にアクセスできるようになった。しかしながら、本講義総体の理論的、思想的検討は、刊行終了から五年以上が経過した現在でもほとんど行われておらず、講義録をその総体として検討し、それが人文諸科学に与える巨大な貢献の射程を確定することは、フーコー研究、そして「フランス現代思想」研究にとって必須の作業となっている。

本論集が目的とするのは、コレージュ・ド・フランス講義の全体を前期、中期、後期の三期に分けた上で、それら三期それぞれに固有の問題構成と、それら三期に通底する問題の総体を、単に哲学的観点からのみではなく、権力理論、(ポスト)マルクス主義、法哲学、倫理学、美学、科学認識論、精神分析など複数の観点から明らかにすることであり、また逆に、コレージュ・ド・フランス講義がこれらのディシプリンにもたらす巨大な貢献の射程を評価、確定することである。

従来、コレージュ・ド・フランス講義は、フーコーがその著作を執筆するための準備の場であると考えられてきた。しかし、本講義全体が刊行されることによって私たちが理解したのは、本講義がその多くの部分において、フーコーが存命中に刊行した著作とは独立した主題、概念を練り上げる一つの巨大な未知のコーパスをなしていた、という驚くべき事実である。この巨大なコーパスを全体的、総合的に論じる研究は未だ存在しておらず、本論集の独自性は、この巨大なコーパスをフーコー理論総体の中に位置付け、人文諸科学の複数の視点からその革新性を理論的、思想的に評価、確定することにある（なおこの目的は、本論集に関係したもう一つの論集『フーコー研究』（小泉義之・立木康介編、岩波書店、二〇二一年）にも共有されている。これら二つの論集は、京都大学人文科学研究所における共同研究「フーコー研究」の成果である）。そのため本論集は、コレージュ・ド・フランス講義を以下の三期に分けて、それぞれの特異性を明らかにする。

前期（一九七〇—一九七五年）

『〈知への意志〉講義』、『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』、『精神医学の権力』、『異常者たち』から構成されるこの時期に、フーコーは考古学からニーチェの系譜学へと移行しつつ「権力—知」概念を練り上げ、その概念を通じて権力理論と認識理論を刷新した。「権力—知」概念とは、ある権力関係の構成が、必ずある知の構成を伴う形でなされる、という考えのことである。例えば、精神医学や規律権力の行使は、医学的知、心理学、教育学のような人文科学的知を構成することなしにはなされない。フーコーはこのような「権力—知」概念に依拠して、権力を、諸主体を規律化する規律権力として基礎付けると同時に、そのような規律化の過程を戦争モデルに基づいて基礎付けた。ここで言う「戦争」とは、「社会防衛」のために「異常者」（社会形成を脅かす危険のある者たち、すなわち犯罪者、狂人、失業者など）を排除、隔離する闘争のことである。そのような闘争は、規律権力に

よって「異常者」の規律化、規範化を試み、規律化されない主体を隔離空間（病院、監獄）に排除する。

私たちはこの時期の講義を、便宜上二つのカテゴリーに分けた。まず「前期Ⅰ」では、初期フーコーが扱ってきた狂気の問題と科学認識論的な問いを系譜学的観点から論じ直し、『性の歴史』第一巻（〈知への意志〉）への導入ともなる、『〈知への意志〉講義』、『精神医学の権力』、『異常者たち』を扱う。武田論文は『〈知への意志〉講義』から出発して、一九七〇年代から晩年の八〇年代に至るまで、「狂気」の言語の問題が、ある種の実践や身体性の問題として、フーコー思想に徹底して存在することを示す。田中論文は、『異常者たち』を分析し、「規範」による「異常者」の「正常化」の問題を、「個体的で局所的な真実—真理の生産」との関係において考察する。ドリール論文は、『精神医学の権力』、『異常者たち』から、フーコーと脳科学（ニューロサイエンス）の知られざる関係と、フーコーが『精神医学の権力』で提示した「神経学的身体が登場」という問題系について考える。

「前期Ⅱ」では、『監獄の誕生』を準備する講義『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』を扱う。これらの講義の出版によって初めて明らかになったのは、この時期のフーコーが、アルチュセールの「国家装置」という概念に注目し、その批判的検討を通じて自らの権力理論を、とりわけ「規律権力」に結実する概念を構築していた、という点だ。その意味で、この時期のフーコーはマルクス主義に極めて接近しており、同時にそれを批判的に乗り越えようとしている³⁾。佐藤論文は、『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』を分析し、アルチュセールの「国家装置 (appareil d'Etat)」からフーコー的「権力諸装置—配備 (dispositifs de pouvoir)」への理論的移行と、フーコーによるアルチュセールの理論の乗り越えの試みについて論じる。バリバル論文は、『刑罰の理論と制度』におけるアルチュセールの「国家の抑圧装置」概念の痕跡と、フーコーによるマルクス主義との極めて錯綜した「対決」について論じる。相澤論文は『懲罰社会』（『処罰社会』）を詳細に読解し、その議論を、「良き労働者」の形成メカニズムの洗練を通じた「懲罰社会」から「規律社会」への移行として跡付ける。箱田論文は、フーコーが『処罰

社会』と、その同時期に展開した「人民」概念を、フーコーが監獄情報グループ（GIP）を通じて接触のあったプロレタリア左派（GP）との差異化を通じて論じる。最後にドゥフェール論文は、『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』の時期にフーコーが中心になって展開し、両講義の問題設定を直接的に駆動していた監獄情報グループの実践を、当事者として詳細に証言する。

中期（一九七六―一九七九年）

『社会を防衛しなければならない』、『安全・領土・人口』、『生政治の誕生』から構成されるこの時期に、フーコーは、戦争モデルを発展させて「統治性」概念を練り上げた。「統治性」とは、規律権力と生権力を包含する、『社会防衛』のための国家の統治テクノロジーの総体であり、フーコーが「生政治」と名付けたものにほぼ等しい。まず『社会を防衛しなければならない』においてフーコーは、「社会防衛」を目的とした社会統治を「別の手段で継続される戦争である」（クラウゼヴィッツの「戦争とは別の手段で継続される政治である」という定式を逆転させたもの）と定義し、統治性を全面的に戦争モデルによって基礎付けた。そして、『安全・領土・人口』では古典的自由主義の分析、『生政治の誕生』では新自由主義の分析を通じて、統治性を（新）自由主義との関係から、環境介入権力として基礎付けた。環境介入権力とは、主体を直接規律化する規律権力とは異なり、主体を自由放任した上で、主体の置かれた環境の設計を通じて主体の行為を統治の望む方向に導くような統治方法である^③。

最初にメッザードラ論文は、フーコーの「統治性」、「生政治」の理論の中に、『刑罰の理論と制度』、『処罰社会』が見出したような階級闘争、労働力の問題系が、マルクス主義をポスト六八年的に再定義する仕方で見出すことを示す。藤田論文は、『言葉と物』から統治性論に至るフーコーの人文科学批判を分析しつつ、統治性論において人文科学批判が深化され、「生命的―主権的複合体」という視点が新たに提示されていることを示す。西迫論文は、Covid-19のパンデミック状況を念頭に置きつつ、『安全・領土・人口』における予防接種の議論から、生政治とはどのような統治テクノロジーであるのかを、「セキュリティ」概念との関係において論じる。最後にラッツアラート論文は、フーコーの「生政治」概念をCovid-19のパンデミック状況と新自由主義の世界的支配という試練にかけ、「生政治」概念がマルクスの意味での階級闘争（労働者と資本家の闘争のみならず、男性と女性、白人と非白人の闘争にまで拡張された）を隠蔽してしまうことを批判的に示す。

後期（一九八〇―一九八四年）

『生者たちの統治』、『主体性と真理』、『主体の解釈学』、『自己と他者の統治』、『真理の勇氣』から構成されるこの時期に、フーコーは統治性概念を、古代ギリシア・ローマにおける主体形成の問題へと適用し、主体概念の根本的な刷新を図った。後期における統治性とは、主体が自己を反省的に統御し、主体が自己自身を一つの芸術作品のように練り上げる実践（自己統治）の総体であり、その過程において、他者との関係を統御、統治するというもう一つの統治が介入する（自己と他者の統治）。この時期のフーコーによれば、自己の統治、すなわち主体による自己形成（主体化）は、主体と他者との関係性なしには存在しえない。そして、主体が自己を芸術作品のように練り上げる際に重要な役割を果たすが、真理と勇氣である。主体は自己形成を通じて一つの真理に到達することで、それまでとはまったく別の自己へと変容しうる。また、そうした自己変容をもたらす真理を獲得するためには、真理を探究し、獲得した真理を他者に向けて説明する勇氣（パレーシア）が必要となる。こうして統治性とは、まさしく「自己と他者の統治」を通じて主体化の実践として再定義される^④。

まずサブ論文は、講演「批判とは何か」から『自己と他者の統治』、『真理の勇氣』までの広範囲のテキストを

論じ、一九七〇年代末から一九八〇年代に展開された主体性と真理の関係を、「批判」、「抵抗」概念から分析する。坂本論文は、「規範」概念をめぐるフーコーとカンギレムの密接な関係に着目し、そこから生まれた「規範化される生」という概念が、『快楽の活用』、『自己と他者の統治』、『真理の勇氣』のような八〇年代フーコーにおいて、「規範をつくる生」へと転回したことを示す。立木論文は、『自己の解釈学の起源』、『自己と他者の統治』、『真理の勇氣』におけるフーコーのパレーシア（真理を語ること）概念を仔細に分析し、そこから「精神的分析のパレーシアとは何か」、あるいは「パレーシア的精神分析とは何か」という独自の問いを展開する。久保田論文は、『真理の勇氣』が提示する、古代から近代に至るユニコス系譜（スキャンダラスな現れとしての、芸術Ⅱ生としてのシニシズム）に照らして『狂気の歴史』を再読し、サドⅡ「非理性」の救出を試みる。最後にパトラー論文は、フーコーのバークレー講義『恐れなき発言』から出発して、フーコーのパレーシア概念と自著『アセンブリ』の集会、抵抗概念の関係について考察する。

本論集は、京都大学人文科学研究所における共同研究「フーコー研究——人文科学の再批判と新展開」（班長・小泉義之）の一企画として構想され、共同研究班メンバーに、科研究費研究課題「ミシェル・フーコー」コレージュ・ド・フランス講義」総体の理論的・思想的的研究」（代表者・佐藤嘉幸）と「科学史叙述の新モデル構築に向けて——二〇世紀フランス思想における科学史研究の再検討」（代表者・立木康介）のメンバー、そして国外の研究協力者を糾合して成立したものである。原稿を寄せてくださった方々全員にお礼を申し上げる。そして最後に、本論集の完成に向けて暖かな激励と協力をいただいた、小泉義之、立木康介、市田良彦の各氏に感謝しておきたい。

註

- (1) 数少ない例外的試みとして、以下の連続セミナーの記録を参照。Foucault 13/13. Seminars moderated by Bernard Harcourt and Jesús R. Velasco, Columbia University, 2015-2016. <http://blogs.law.columbia.edu/foucault1313/>
- (2) この点については、フランスで刊行された以下の論集を参照。Laval, Christian, Pallofieri, Luca, et Talyan, Ferhat (dir.). *Marr & Foucault: Lectures, usages, confrontations*. La Découverte, 2015.
- (3) この点については、以下を参照。佐藤嘉幸『新自由主義と権力——フーコーから現在の哲学へ』、人文書院、二〇〇九年。佐藤嘉幸『生権力／生政治とは何か——レイシズム、自由主義、新自由主義』、小泉義之・立木康介編『フーコー研究』、岩波書店、二〇一一年。
- (4) この点については、以下を参照。箱田徹『フーコーの闘争——統治する主体』、『慶應義塾大学出版会』、二〇一三年。